

## 共同研究の経緯

### アジア祭祀芸能の比較研究

——非文字資料（図像・身体技法・景観）の体系化——

研究代表者 野村 伸一

#### 1. 目的

東アジアにはさまざまな神<sup>かみ</sup>が存在する。天神地祇、人鬼（死者の靈魂）、祖霊、水中孤魂、あるいは無縁仏、怨霊、悪霊も広い意味では神<sup>かみ</sup>である。神<sup>かみ</sup>を迎え送る営みが祭祀であり、それに伴う一定の身体行為を祭祀芸能とよぶ。祭祀芸能とは狭義には神<sup>かみ</sup>の振る舞い（神態<sup>かみわざ</sup>）だが、神<sup>かみ</sup>をよび招く特定の仕種、神歌、呪語の唱えも祭祀芸能である。祭祀芸能には各地域の人びとの精神世界が凝縮されている。東アジアでは古来、こうした祭祀芸能が多彩に展開されてきた。それは近代国民国家が形成される以前の基層文化に由来するところが多い。これを東アジアの規模で比較対照することが本研究の目的である。

#### 2. 経緯と基軸の設定

##### 1) 経緯

比較対照するためには個々の祭祀芸能を掬い取り、全体のなかに位置付ける基軸が必要である。ところが、現状ではそれが無いに等しい。これは東アジアの精神世界を体系的にみようという意向がまだ備わっていないということ、換言すると日本の東アジア認識はまだ地域別、個別、あるいは国民国家の枠に制約されているということである。その克服のためには、まずは異なる地域、主題を抱える研究者を集い、基軸を提示する必要がある。予算と時間の制約もあったが、研究班はインド、インドネシア、タイ、台湾、中国、韓国、日本を長期にわたって研究してきた研究者10名（野村伸一、鈴木正崇、皆川厚一、吉野晃、丸山宏、廣田律子、星野紘、小川直之、西郷由布子、笹原亮二）で構成された。加えて共同研究者として次の諸氏7名を迎えた。すなわち、韓国からは李京燁（国立木浦大専科國語國文學科教授・民俗学）、金容儀（国立全南大専科人文大専科日語日文学科教授・民俗学、日本文学）、田耕旭（高麗大専科師範大専科國語国文科教授・民俗学）、中国からは余達喜（江西省文聯副主席、民俗学）、陶思炎（東南大専科教授・東方文化研究所所長、民俗学）、馬建華（福建省藝術研究院副所長、演劇学）、台湾からは謝聰輝（国立臺灣師範大専科文學院學文系教授、道教經典）の諸氏である。この研究班では当該地域の特定主題の論文を書くことは目的としていなかった。むしろ、長年馴染んできた地域を踏まえつつ他地域の祭祀や芸能を実見して意見を交換することが期待された。結果的には参加者各自は比較の視点を持って論考をなした（後述「3.2）成果」の項参照）。

## 2) 基軸の設定

一方、基軸に関しては、東アジアのばあい、年末年始の祭祀芸能がまず第一に注目される。中国では秦漢以前の時代から、年末に農神その他を迎えての農耕感謝（蜡）、鬼やらい（儺）、諸神および祖霊の祭祀（臘）がおこなわれてきた。それらは12月の行事としてあったが、のちには互いに複合し、さらに正月の行事とも結びついていく。これにより正月行事が複雑化していった。その間に蜡、儺、臘の複合、分化、肥大化、さらに儺礼から儺の戯への変容などがあった。これは中国だけでなく、朝鮮半島や日本、琉球などでもみられた。こうしたことを踏まえて、この研究班では、初年度（2009年12月）に日本の花祭を調査した。花祭は元来、山伏による臨時の神楽に発して複雑な変遷を遂げて今日に至った。そこには厳しい環境下、生活の基盤が保たれたことへの感謝、災厄除け、来訪する鬼による地域の祝福、きたる年の五穀豊穡への祈願、さらには「花」を通して共同体成員の生命の更新を願う祭儀（花育て）が含まれる。ここにみられる祭祀と芸能は儺儀から儺戯への変容として捉えることができる。それはまた中国における年末年始の儺の儀礼の変容とも通じる。これと関連するものとして3年目（2012年1月）に韓国蝟島<sup>ウイド</sup>の村祭を現地調査した。これは漁村の初春の祭祀である。そこでは諸神、とりわけ龍王と水中の死霊を迎えて一年の無事を感謝し、併せて平安、豊漁を祈願する。同時に模造の船にあらゆる災厄を載せて奏樂しつつ海彼に流す。こうした祭祀儀礼・芸能行為は東アジアの各地にみられるもので、その根柢には共通する海洋他界観がある。それを各研究者は事例を通して実感した。

ところで、いくつかの主要な基軸のうち、もうひとつ重要なものがある。すなわち東アジアの祭祀においては遭難死、客死などによる各種の死霊、祖霊の迎え方、送り方が地域ごとに独特の展開をみせる。これを基軸として設定する必要がある。この基軸はたいへん古くからあり、郷儺として儀礼化されていたものだが、それを仏教と道教が取りこんで体系化した。旧暦7月の盂蘭盆会、中元節また水陸会や黄籙齋、折に触れての普度<sup>フドゥ</sup>（施餓鬼）などがその典型で、これは今日なお各地で盛んにおこなわれる。研究班では時間の制約から、その祭儀の現場に臨むことはできなかったが、福建省泉州地域を訪問し、死霊祭祀を主題として多角的に調査した（2年目、2010年9月）。泉州、南安、晋江は台湾の漢族文化の主要な故地でもあり、元来、神仏（わけても観音、瘟神王爺）の祭祀とそれに伴う奉納芸能が盛んなどころである。とくに泉州の7月の普度は地域を変えつつ1ヶ月も継続する盛大な行事であった。それは新中国の体制下では迷信行為として禁じられたが、それに伴う各地域の寺廟での奉納演劇は健在である。経済力の増した今日、それはむしろ復活し盛況の感さえある。研究班ではそのことを高甲戯や梨園戯を通して実見し、併せてそれを支える廟文化を調査した。

以上、3年間におこなった全員での現地調査について記した。このほか、班全体の研究会を5回、開催した。すなわち、1. 花祭をめぐる公開研究会（2009年12月12日、神奈川大学） 2. 中国泉州地域の祭祀芸能をめぐる研究会（2010年9月10日、泉州） 3. 「海の民俗伝承と祭祀儀礼—船による神の来往と身体表現—」公開研究会（2011年12月11日、神奈川大学） 4. 東アジア祭祀芸能の比較研究をめぐる研究会（2012年1月26日、韓国光州全南大学） 5. 「海を越えての交流—民俗、祭祀、芸能の面から—」の表題下、本機構の別班「アチックフィルム・写真に見るモノ・身体・表象」グループと合同の公開研究会（2012年9月15～16日、神奈川大学）を開催した。以上1～5に加えて、本研究班内の個別班による調査および発表も計4回おこなわれた（別途掲載「共同研究の活動記録」参照）。

### 3. 研究の意義と成果

#### 1) 意義

東アジアには多彩な祭祀芸能が存在する（あるいは近い過去まで存在した）。にもかかわらず、それを全体的に把握しようとする機運が醸成されていない。これは日本に限らないのだが、要するに、この地域での「東アジア認識はまだ地域別、個別、あるいは国民国家の枠に制約されている」。それどころか、むしろ、「国民国家の枠」は日増しに強固になり、昨今では一国の伝統文化財を「世界遺産」とし、それを国権の争いの道具としかねない趣さえある。こうした状況のなか、本研究班の掲げる祭祀芸能の比較研究は、一見、迂遠なようにみえるが、実は前近代の統一された文化圏を浮かび上がらせる最も確実な営みとなると確信する。歴史を大局的にみるならば、国民国家の枠はさほど強固なものではなく、必ず克服される、また克服すべきものである。実際、年末にその年の平安、生業活動を感謝し、神、祖霊を迎えてともに饗宴し、併せて新年を予祝すること、あるいは、7月の法事を通して身寄りのない諸霊を思いやり、また無祀孤魂への精神的な負い目を除くこと、これらは東アジア基層文化の基軸なのである。そこでは歌舞があり、叙事的な語りがあり、そこから発した芝居もある。こうした精神の文化史を「わがこと」とすることができるならば、東アジアの一体性は堅固に築かれるであろう。そこでは中国人、朝鮮・韓国人、日本人などの呼称は符丁でしかなく、余り意味をなさない。実際、本班における共同研究内ではそうした雰囲気を実感した。残念ながら、それはまだ限られた分野のことにすぎないのも事実である。しかし、こうした積み重ねが将来、実現すべき東アジア共同体の礎になるに違いない。本研究の意義はここにある。

#### 2) 成果

本研究班での成果は次のとおりである（以下のうち、2～16は、論究の地域に基づく分類である）。

〔総説〕

1. 野村伸一「総説 東アジア祭祀芸能の比較のために—基軸の設定」

〔アジア〕

2. 星野紘「ユーラシア域の祭祀舞踊——神懸かりと動物模擬——」

3. 田耕旭「東アジア伝統人形劇における口唱歌の普遍性」

〔インドネシア〕

4. 皆川厚一「インドネシア、バリ社会において中国由来とされるいくつかの文化的事例について」

〔タイ〕

5. 吉野晃「タイ北部、ユーミエン（ヤオ）の儀礼における女性と歌謡」

〔中国、台湾〕

6. 陶思炎「儺文化と江蘇省南部の儺面」

7. 余達喜「中国儺文化と日本の祭祀芸能」

8. 廣田律子「儀礼知識の伝承に関する研究—身体コミュニケーションによる伝承とテキストによる伝承から—」

9. 鈴木正崇「中国福建省の祭祀芸能の古層—「戲神」を中心として—」

10. 謝聰輝「泉州南安奏籙儀礼初探—洪瀨唐家を中心に」

〔韓国〕

11. 李京燁「漁業に関する祭祀芸能にみられる漁撈の儀礼的再現の様相—韓国濟州島と黄海道の比較—」
12. 金容儀「韓国の舞童と日本の稚児舞楽の比較研究序論」
13. 李徳雨「韓国西海地域におけるマウル信仰研究—京畿道と忠清南道を中心に—」

〔日本〕

14. 小川直之「「依代」の比較研究」
15. 笹原亮二「民俗芸能と祭祀—中在家の花祭の現場を巡って—」
16. 西郷由布子「身体技法の記録—渋沢「花祭」からモーションキャプチャへ—」

〔調査報告・図録〕

17. 内藤久義「2009年度 中在家花祭次第表」
18. 李京燁・三村宜敬・李徳雨「韓国蝟島の茅船送り」

以上の論考、研究ノートはさまざまな主題を扱っている。その内容紹介はこの場では割愛する。これについては野村伸一「総説」の各項目において言及したが、それはあくまでも主題の提示にすぎない。詳細については個々の文章に当たっていただきたい。以上、「共同研究の経緯」の大概を記した。